

が、いつの時代か泉の字が白と水に分かれて白水沢と呼ばれるようになったのではないか。

作者の憶測

### \*白水沢\*

製鉄・鍛冶・鋳物関係の地名は郷土に多い。例えば、多多羅台（中津又・久保）・大吹沢（馬場目）

- ・タタラの堰（大川）・<sup>かなくそ</sup>金糞沢（町山・白水沢）
- ・火沢などである。

五城目町史から

## しんでん【真坂新田家の下】

江戸時代になると、幕府や藩の新田政策によって、耕地の開発が盛んに行われた。秋田藩においてもその例外ではなかった。

1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名

## すぎき 八郎潟町 <sup>すぎき</sup>洲先

湖岸の川口にできた土地（＝洲、水底にたまった土砂が高くなり水面に現れて島のようなもの）を洲先といい。沖谷地、葭谷地、イカリなどの地名がある。

地名と歴史 1 八郎潟町広報433 ふるさと散歩 105

畠山四郎

## すわじんじゃ 諏訪神社

祭神は、建御名方神で、明治5年（1872）、6月村社となっています。創建は定かではありませんが、千数百年前神功皇后が、三韓征伐の航路の途中に激浪に遭い漂流し、蝦夷ヶ港に御着した時に、羽立村に諏訪明神をまつり、武運長久を祈願した、と伝えられています。

ここには、江戸時代に菅江真澄や与謝蕪村が訪れていますが、その与謝蕪村の句碑が境内入り口に

建てられ、さらに奥には芭蕉や地元夜叉袋出身の俳諧師素大の句碑、そして北朝年号の古碑や石仏が並んでいます。

諏訪神社の六角型の神輿は、正徳4年（1713）佐竹公より男鹿真山神社へ奉納されたもので、そのうちの一輿を明治8年（1875）に譲り受けたもので、男鹿真山神社の神輿とは兄弟となっています。

### 蕪村句碑

蕪村が出羽の国からみちのくへぬける時、夕暮れになってここ夜叉袋に着いています。宿をさがしている時に、古寺の横庭で麦をつく老人をみて生まれた句が、諏訪神社境内の句碑に刻まれています。

涼しさに麦を月夜（つくよ）の 卯兵衛かな  
涼風の吹き通う月の夜。古寺の広い庭に臼をすえて一人ぼつんと月明かりの中で麦をついている宇兵衛の姿は、さながらお月さまの中で餅をつく兎ではないかと思まごうような、この世ならぬ姿であるよ、の句意です。古寺は、現在の諏訪神社の付近とみる説もありますが、まだはっきりしていません。

与謝蕪村

享保元年（1716）－天明3（1783）。江戸中期の俳諧師、画家。旧姓谷口。別号、夜半亭、落日庵、宰鳥。攝津（大阪）東成郡毛馬村生まれです。

### 芭蕉句碑

芭蕉の句碑の碑面には

“ 月いづこ 鐘は沈める 海の底 ”

句碑の裏面には、『寛政五癸丑年九月小夜庵社中素大 野了 樗木』と刻まれています。

「鐘は沈める」の意。当諏訪神社の境内を含む広大な敷地一帯は、大福寺（現五城目町大川）跡とされています。（蕪村の文中 古寺の広庭）大福寺沿革の中に、「浦城主三浦兵庫介が落城の折り、菩提寺の大福寺の宝物の鐘などを積んで、八郎潟を西方向の男鹿に舟出したところ、男鹿近くで大嵐にあい舟が転覆し宝物の鐘も沈んでしまった」とあります。素大はその様を詠んだものと思われる